



▲三島村土居山ノ前班の女性と子どもたち



▲戦後、太平洋戦争開戦部分が隠されていた教科書

◎教科書からわかる教育内容

当時の「修身」という科目の教科書には、日露戦争は明治天皇の神聖な力によって勝利したということや、敵に捕まりながらも「天皇陛下万歳」と言いながら敵国で死刑に処せられた軍人の話などを載せ、将来軍人などで戦争に加担する国民を作り出すための軍国教育が進められていたことが分かります。戦後には、教科書の中の軍国主義に関する部分は先生から紙を貼って隠すように言われたそうです。その内容は天皇の神格化や戦争に関する内容が多いようです。



◎子どもたちの様子

戦時中は子どもたちにも役割が与えられていたことが証言から垣間見えることができます。ある日突然大篠小学校に兵士が駐屯するようになり、セリを一握り取ってくることや筒いっぱいのいなごを取ってくることなど兵士の食料調達が宿題として出されていたそうです。戦況が悪化してくると、空襲警報が発令されると下校したり、1日中防空壕に飛び込む練習をしたりと勉強がほとんどできない日もあったそうです。戦争によって子どもたちの学びの機会が奪われていたのです。

◎おわりに

太平洋戦争時は、戦争が進むにつれて生活が戦争一色になり「お国のために」を共通認識として強いられる時代でした。国民全員が戦争に協力することが当たり前であり、日常生活が犠牲になっても耐えるしかなかった市民の辛さは計り知れません。このようなことを二度と繰り返さないためにも、後世の私たちが今ある平和を維持していくことが大切だと考えています。

今年には南国市で下記の展示が行われます。展示に足を運ぶとともに、今ある平和の尊さについて考えてみてはいかがでしょうか。



▲4号掩体と子どもたち

あんばんのナカミ展！

こんなものであったがよ～

連続テレビ小説「あんばん」の世界へ。

やなせたかしと妻・のぶをモデルにした物語のふるさと、高知県・物部川エリア（南国市・香南市・香美市）で、ドラマの美術や小道具を通して「あんばん」のナカミに迫る企画展の第2弾を開催します。今回のテーマは、『ドラマと、戦争』。ドラマの舞台であるご当地の戦争に関する歴史資料などを合わせて紹介します。

南国会場

- 場所／海洋堂スペースファクトリーなんこく2階企画展示室（南国市大堀甲 1623-3）
- 期間／令和8年9月5日（土）～9月27日（日）
- 開館日時／水曜日～月曜日 10:00～18:00
- 休館日／毎週火曜日



その他、詳しい内容はこちら

『南国市と基地』

南国市にはかつて海軍航空隊基地があり、たびたび敵の空襲を受けることがありました。

現在にまで残るその痕跡や、基地がもたらした人々の暮らしの変化を紹介します。

- 場所／南国市立図書館ごめんちあ2階（南国市駅前町3丁目1～2）
- 期間／令和8年7月中旬～8月末頃
- 開館日時／火曜日～日曜日 10:00～18:00
- 休館日／毎週月曜日・祝日・館内整理日



▲グラマン戦闘機の薬きょう



▲4号掩体出土遺物



▲女性たちの祈りが込められた千人針（南国市左右山地区で作成されたもの）

『戦争と女性と子どもたち』

◎はじめに

戦後80年の昨年、南国市後免町で少年時代を過ごしたやなせたかし先生と妻・暢さんをモデルにした連続テレビ小説「あんばん」（NHK）が放送されました。朝田のぶと柳井嵩の二人が戦争という激動の時代を生き、生きる意味や本当の正義とは何かを考え抜く姿が強く印象に残る内容でした。ドラマでは戦争にまつわるシーンが大きく取り上げられ、教師を目指すのぶ、出征する嵩を中心に二人を取り巻く戦時中の状況も丁寧に描かれています。

◎「あんばん」で描かれた戦争

「あんばん」では戦争に関する描写が克明に描かれていました。嵩が所属した陸軍の小倉連隊での理不尽な内部暴力や戦地のリアルな状況、兵士の心境等が生々しく描写されています。

戦争の描写と言えば軍人や前線にスポットが当たりがちですが、「あんばん」では国内の女性や当時の教育の様子も描かれています。のぶの母と妹たちは大日本国防婦人会に加入して町内会の活動に参加していたり、のぶ自身も積極的に慰問袋作りや休日には献金の呼びかけを行うなどの熱心な取り組みを行い愛国の鑑として注目される存在でした。

また教師になったのぶは、忠君愛国の精神を子どもたちに教えており、教え子を戦地に送り出す立場でした。戦死した原豪の葬式に参列した子どもたちも「立派な兵隊さんになってお国の役に立ちたい」と教育内容を素直に受け止めているシーンがありました。

◎当時の南国市の女性

戦争において前線で戦うのは男性の役割でしたが、女性は「銃後の守り」として愛国婦人会や大日本国防婦人会などに所属し、兵士の見送りや慰問袋、千人針等を作成するなど兵士を支える役割を果たしていました。南国市にも大日本国防婦人会のタスキをかけている女性の写真や千人針が残されています。

千人針とは戦地へ赴く家族が無事に帰ってきてほしいという女性たちの願いをこめて作られ、兵士が銃弾よけのお守りとして肌身離さず持っていたものです。太平洋戦争中には軍部や全日本国防婦人会が街頭で大々的に参加を呼びかけていました。武器を持たない女性たちも千人針に参加することでお国のために貢献しているという役割を与えられ戦力化されていたのです。

他にも、若い男性が出征して不在のため、掩体作りなどの重労働にも女性や子ども等が駆り出されるなど労働力としての役割も担っていました。